

売薬の意匠あれこれ 〈その23〉 売薬の看板[金看板]

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長 平井 有 (ひらい・たもつ)

売薬の宣伝や広告の媒体には、看板、チラシ、ピラ、折り込み、ポスターなどがありました。

近年ではネット通販の拡大でインターネット上での広告も盛んですが、現代では医薬品等の広告に関しては薬機法(医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律)や医療広告ガイドラインなどで、不適切な広告で国民の保健衛生上大きな影響を与えることのないよ

うに適正な表示が規制されています。

昔の看板には今回ご紹介する「金看板」の他、今後紹介する「絵看板」や「珙瑯(ほうろう)看板」などかありますが、いずれも現在の薬機法等による規制以前の時代に作られたもので、その視点に立っていわば文化遺産の一つとしてこれらの看板をご覧ください。



「仁丹」

明治38年(1905)に当時の森下博薬房が発売した口中清涼薬「仁丹」は日露戦争の勝利、大礼服の商標と相まって発売2年で家庭薬の売り上げトップとなりました。

現在、森下仁丹株式会社となった同社の世界トップクラスのカプセル製造技術(粉末、液体、微生物などあらゆるものを包むことができる「シームレスカプセル」)は、医薬品から食品、産業用まで応用され展開しています。



「妙布」

「即除苦惱」と書かれていますが、「妙布」は現代も用いられるわが国で独自に発展した貼付薬の前身の膏薬、貼り薬の一種で肩こり、打ち身などに用いられた湿布薬です。

金看板という言葉には「世間に対して誇示、宣伝する主義・主張などを指す意味」もありますが、これらの金看板は製作費も高くそれを掲げることによってその薬舗(薬局)のステータスともなり、信頼の証しとなったのです。

「毒神」(どくしん)

仁丹以外はすべて現在では存在していない薬ですが、この「毒神」は効能が「諸毒消し」とあり、ウイルスや胎毒などのさまざまな体でできた毒素を消し去る効き目が、神薬のように優れているという意味で付けられたと思われる。現代でも「毒」の字の入っている売薬には「複方毒掃丸」があります。

なおこの看板の「神毒」の字体は浮き出た文字細工で作られています。



「蘇香圓」(そこうえん)

この看板も毒神と同じく浮き出た文字細工で名前が製造されており職人技が感じられます。これら金看板は単なる金色のペンキを塗ったものではなく金色の仏壇や仏像を作る仏師の技と同じく、金箔を貼ったり、膠(にかわ)の入った水で金粉を溶いた絵具(金泥 きんでい・こんでい)を塗って作られたものです。のぼせ症やたん・せきなどに用いる紫蘇(業)を成分とする圓(丸薬)製剤だったようです。

「全治水」

「全治水」は現在でいうところの表皮性抗真菌薬の水剤です。効能にたむし、みずむしと書かれています。たむしは、いんきんたむしとも呼ばれ、現代では股部白癬や体部白癬、みずむしは足白癬と呼ばれ、同じ真菌の一種の白癬菌の感染が場所によって呼び名が変わりますが、治療薬は同じものが用いられます。



「不思議膏」

「不思議膏」も妙布と同じく膏薬、貼り薬の一種で神経痛やリウマチ、肩や腰の痛みの効果を謳っています。明治の文明開化以降は、夢想や秘方などの業への命名は禁止されましたが「不思議」や「妙」はすれすれの命名だったようです。なお、不思議膏や妙布は金色の金属板の上にペンキで名前を書いており、金看板の簡易製造品です。